

住みごこち一番・可児 ―～安心、元気、楽しいまち～の推進

春の訪れに心が弾む

相手を思いやる言葉の数々は
我が心も豊かになる
どんな時でも「ありがとう」を忘れない
その一言で笑顔になれる

桜（可児市役所北側）

令和2年度 三大ニュース（実績）

11月13日

人権講演会と対話タイム

場 所 広見地区センター体育館
講 師 小栗正幸
テーマ 反抗期の子ども達への対話術



11月25日～12月7日

人権教育優秀校表彰式 （標語募集20周年記念）

小学校の部
①春里小学校
②南帷子小学校

中学校の部
①中部中学校
②西可児中学校
③広陵中学校



西可児中学校

年 間

学校への支援

・標語（20周年）、300字小説（13周年）の募集
・ぬくもり教室（9周年）
・人権本巡回制度（12周年）
75冊×2コース全小学校巡回



今渡南小、桜ヶ丘小で開催



市内小学校人権本巡回

ぬくもりのよろこび

「継続は力なり！」

当センター会長 齋藤美智子

昨年は、新型コロナウイルス感染症拡大により、予定されていた主要な行事が延期または中止となったために街頭啓発活動（地区センター祭り等）もなく、市民の皆様と直接ふれあう機会が大幅に減少しました。

しかし、このような先行き不安な状況にある時こそ、将来の可児市の子ども達への人権教育の種まきは重要であり、継続が必要だと考えています。当センターでは学校への支援に、より一層力を入れて活動しています。また先生方のご協力のおかげで、例年通り学校に関する啓発ができましたこと、お礼申し上げます。

今後とも、私たちの啓発活動が今の時代に対応したもの、充実したものとなるよう努めてまいります。

特集 令和2年度 人権文化の光彩

(審査員：他団体の代表と関係者)

第20回 人権啓発入賞[標語]の部

2,608作品より選考

【最優秀賞】

コロナ禍で きよりはとつても さべつなし

長谷川 未羽(小学校五年生)

【優秀賞】

見つけ合おう 十人十色 皆のよさ

ちがうけど あの子もその子も

助けてを 救う勇気と 言う勇気

マスクして はなれてあいさつ

コロナでも 心の距離は 取らないで

岩崎 陽斗(中学校二年生)

【入選】

ネットの言葉 直接会っても 言えますか?

やめよう 見て見ぬふりと 知らんぷり

踏み出そう 見て見ぬふりの 自分から

話してこらん きつととどくよ 君の声

「ありがと」 笑顔になれる愛ことは

やさしさで つつんであげる

心の木 ふわふわ言葉で 満開だ

細江 脩隼(小学校六年生)

いじめじゃない? 見ている君も いじめだよ

「やめようよ」 言える勇気を 持たたいな

越えちゃダメ 遊びといじめの 境界線

友達を しかれることも 友情だ

「どうしたの?」 そこで断ち切る

その言葉 いつてもいいの かんがえて

やめようよ 自分と他人の

なぜ分ける みんないつしよの

人権は みんなにあるもの 守るもの

やらないよ 人にされたら いやなこと

言わないよ 自分が言われて 嫌なこと

やめてと言う勇気と

やめようと言う勇気

場に合わせ 悪いことも 流される

その言葉 自分が言われて どう思う?

どうせなら けんかするより 笑いたい

どうしたの 人を助けるまほうの言葉

ステイホーム ソーシャルディスタンス

みんなで守ろう 新型コロナウイルス

黒木 美侑(小学校四年生)

第13回 人権啓発入賞[300字小説]の部

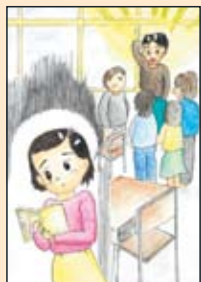
374作品より選考

【最優秀賞】

あの一言で

長瀬 三古都(小学校六年生)

私は、暗くて学校ではいつも一人で本を読んでいた。それに比べてあの子はいつも明るくてみんなの人気者。仲良しい子なんていないし学校ってつまらないな。そんな学校生活を送っていた。今日も本を読んでいると、皆がドッジボールをしようと外に向かっていた。私はいいや。と思い読もうとしたら教室に誰かが来た。人気者のあの子だ。「来ないの?一緒にやろうよ。」と言ったが、「私、暗いし行ったら楽しくなくなるよ。」と答えた。するとあの子が言った。「まずは君が皆を知ろうとしないよ。」それで気づいた。仲良くなれないと思ひこんでたのは自分だと。それから私は皆と仲良く話す事ができるようになった。今でもあの子に感謝している。本当にありがと。



【優秀賞】

アリガトウ

三浦 梵愛（小学校六年生）

「ありがとう」私が言われてうれしい言葉だ。ある日、私のクラスにブラジルの転校生が来た。初めは、その子の周りにはたくさんの方がいた。だけど、どんなその子の周りの人はいなくなっていた。それは、日本語がしゃべれないからだ。ある日、ペアを組んで調べ学習をする授業があった。周りはどうも一緒に活動するペアが決まっていた。でも、その転校生の子は一人だった。私は、思い切って言うてみた。「一緒にやろ」と。そしたらその子は、カタコトの日本語で「アリガト」と言った。それは、その子が転校してきて初めて聞いた日本語だった。言われた時とてもうれしかった。それ以来、私は声をかけるやさしさや話してみる勇気が大切だと思った。

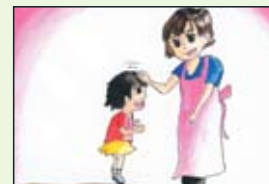


【優秀賞】

お母さんの手

小澤 星樂（中学校三年生）

何年か前の話のこと。「行ってくるね。」寝ている私の頭を撫でながらお母さんが言った。私のお母さんは朝早くから仕事に行ってしまう。忙しいにもかかわらず、お母さんは仕事に行く前に必ず私の部屋に来てくれて頭を撫でてから家を出ていく。そんなお母さんの手は、いつも温かい。ご飯を作ってくれる時の手、手を繋いでくれる時の手、洗濯をしてくれている時の手。いつでもどんな時も大きくて温かくて優しいお母さんの手。分厚くて、少しキズの付いたお母さんの手。「いつもありがとう。」私は照れくさそうに言った。「こちらこそ産まれてきてくれてありがとう。」お母さんみたいに なれたらいいな。



※挿絵は入賞作品をもとに当センター職員が作成しました。

【入選】

ありがたいこと

小久保 彩人（中学校一年生）

「つるさいなあ。ほつといて。」さとするは母親にどなっていた。ささいなことではにかになり、そのまま夕食も食わずに部屋にこもったさとする。次の日の朝、部屋の前にはおにぎりと「ごめんね」と書かれたメモが置いてあった。さとするは、胸がぎゅーっとしめつけられた。「ごめんね。」と言わなきゃいけないのは僕なのと思った。「おはよう。」母親はいつもと変わらない様子でさとするにほほえむ。さとするは、ほつとした。いつもと変わらない母がそこにいてくれることだけで自分の支えになっていることに気が付いた。帰る場所があること、いつも側にいてくれる人がいることが当たり前じゃなくてありがたいことなんだとさとするは思った。

【入選】

十三秒の留守電

森口 環（中学校一年生）

私は、今学校でいじめられている。前とはとても辛かった。でも、今の私は違う。あの留守電のおかげだ。一ヶ月ぐらい前、ある人からの一本の留守電があった。違う学校の唯一の友達、優美だ。「真子、辛かったね。寂しかったね。でも、もう大丈夫。真子の気持ちを分かってくれる人はきっといるから。私はいつでも真子の味方だから。」けっころ前に送った手紙の返事が無くて、優美にまで無視されていたと思ってたけど、たった十三秒のこの留守電で、すごくはげまされた。ありがとう、優美。私は、今学校でいじめられている。それでも、幸せに暮らしている。

【入選】

日常から芽える笑顔

増田 葵月（中学校一年生）

いつもお花に水やりをしている近所のおばあちゃん。幼いころからお世話になっていた。おばあちゃんはいつも、「おはよう。いつてらっしゃい」と声をかけてくれる。私はそんなおばあちゃんから元氣と笑顔をもらっていた。ある日、いつもどおりあいさつをしていると、おばあちゃんが「いつもありがとう」と言ってきた。なんの事か分からずにいると、「いつもあいさつをしてくれるから、うれしくて、いつのまにか笑顔になってるんだよ。」そう言ってくれた。私はおばあちゃんに笑顔を届けていたことを知ってとてもうれしくなった。そして今日私は笑顔を届けるのであった。「いつてきます。おばあちゃん。」

【入選】

選択

中丸 温翔（中学校二年生）

僕には親友のすぐるがいる。自分より背が高くても頭も良い。でもクラスではいじめの標的だ。どんな周りのからかいもエスカレートしていき、机に落書きされたり、物を隠されたりした。僕もそれを知っていたけど、周りからいじめの標的が僕になるとおびえ注意したりしなかった。ある日、机でうつ伏せていたすぐるに僕は、「大丈夫だよ」と声をかけた。しかしすぐるは、「なんで見たの」と弱々しい声で言った。僕は気づいた。自分は仲間が傷ついていても自分の立場ばかりを考え、何もできない醜い奴だと。こんな親友じゃないと。次の日、いつものようにすぐるはいじめられていた。本当の友情って何だ。選択肢は自分にある。僕は力強く席を立った。

※作品はフィクションです。実在の人物・団体名等とは関係ありません。



春を迎えるに あたって

ぬくもり まゆちゃん 35

作・画:miho/監修:m・h & k・s

〈転校する友達へ〉



(当センター職員による作品です)

★ NIMBY (ニンビー) という言葉があります。“Not In My Back Yard” (我が家の裏にはダメ) の略語で、火葬場やゴミ処理施設などの建設等に際して「施設が必要なのはわかるけど、自分の家のそばに建てるのは止めてよ」ということです。最近では子ども向けの施設も、うるさいとの理由からこの扱いを受けることがあります。私はこの言葉をもう少し広く「総論賛成・各論反対」と解釈しています。

★ 「人権についてどう考えるのか」と問われれば「大切なもの」と答えるものの、自分の家の隣に新しく引っ越してきた方が、刑務所を出たばかりの方だと知ったらどう思うのだろう。また新型コロナウイルスについて「市内で集団感染が発生しましたが感染経路はまだ解っていません」と報道されれば不安な気持ちになりますが、「感染者は外国籍市民のコミュニティです」と言われれば、どこか人ごとのように感じてしまう自分はいないだろうか、自問自答しています。

「総論」では、罪を償って出所した方にも外国籍市民の方にも人権があることは理解しています。しかし、いざ自分の身の回りに影響が及んだ際、本能的な嫌悪感や心の奥底にある本音が顔を出すかもしれません。

★ かつて研修を受けた時に聞いた言葉で「こどもは親の“いう通り”にならない、“する通り”になる」というものがありました。まずは自分の意識改革・行動変容からです。(K・S)

啓発ってどんなことをしているの? その2

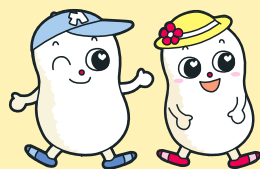
ぬくもり「標語・300字小説」募集編

今号の特集のように、毎年7月上旬から9月上旬の間、「人権」を題材とした標語・300字小説の募集をしています。

約3,000作品。様々な思いが詰まった作品が集まってきます。難しい題材ですが、真剣に自分や他者の「人権」について思いを馳せて作っていただいたことが伝わってきます。

入賞作品は挿画をしてポスターにしたり、作品を額装したりして図書館や市役所ロビーで行う展示会に展示します。

来年度も標語・300字小説の募集をします。募集開始は広報かに7月号、機関紙「ぬくもり」7月号、本センターHPにて掲載します。皆様のご応募をお待ちしています。



図書館での展示



「啓発のひかり」

★ 白内障の手術をした。3年余り悩んだ末の決断。眼帯を取った時のびっくりする程の明るさにちよつと感動。コロナも何か少しのきつかけで収束に向かえばいいのにと祈るばかりである。(m・k)

★ 自治会の有志で田植えや稲刈りをし、餅米の収穫をしています。昨年は機械とお母さん達の手を借りて餅つきをして、自治会の子ども達にあんこ餅・きな粉餅のバック詰めを渡せました。受け取った子ども達の笑顔は我々を元気にしてくれています。(h・s)

★ 今まで読書習慣はなかったのですが、家に居ることが多かったこの1年、200冊以上の本を読みました。まだ読みたい本もたくさんあります。が、暖かくなる季節、外出も満喫できるようにと願いを込めて。(m・w)

★ 2020年4月当初、予定していた行事を実行することに悩みました。中止という選択肢も何度か頭を過りました。しかし、当センター推進員の方の「勇気」を与えてくれる言葉があったから、感染防止対策を万全にして、実行することができました。

コロナ禍という困難を乗り越え、市民の皆様にとつて2021年が幸多き年になりますように願っています。(m・h)